

東京女子大の英米文学科の同級生である幸子さんがアメリカのシアトルから帰国されました。さっそく仲間たちは、スケジュール調整をし、お馴染みの新宿の和食処に集まり、楽しいひと時を過ごしました。コロナ禍で移動も集合も飲食も制限され、4年ぶりの再会となりました。高齢者にとって、4年というブランクはやはり長いようです。自身にも家族にも支障を抱える人も出て、約半数が無念の欠席となりました。私は喜び勇んで参加し、その日の内にメールで、欠席の友人たちに集まったメンバーのお話を伝え、写真を送りました。それに対しても次々と「嬉しい！今度は必ず出席したい！」というお返事を頂き、ますます嬉しい気持ちが湧いてきました。帰国された幸子さんに感謝！

学生時代、幸子さんとは最終の授業が一緒の時、お茶の水駅まで、一緒に帰りました。電車内で下町娘どうし、色々おしゃべりを楽しんでいましたが、キリスト教、教会にも関心を示されました。私が勧めた教会にすぐに出席し、頼まれて、奏楽の奉仕を引き受けたと聞きました。彼女の積極的で、オープンで、柔軟な姿にとても魅かれました。ゼミが違い、女子大は個人主義の雰囲気濃厚でしたから、それ以上の関係はありませんでした。卒業後、彼女の結婚式にスピーチを頼まれ、それ以来、幸子さんとは親しくさせていただいてきました。彼女は50歳台で洗礼を受けられました。

幸せな専業主婦だった幸子さんは、ご夫君の定年退職後、彼を一人残して、単身アメリカの大学に進学し、心理学を専攻するとのこと。50歳台での挑戦でした。彼女は大学院まで進み、supervisorの資格を取得。日本では就業のチャンスがないため、アメリカのgreen cardを得て、次にはご夫君を伴ってアメリカに。彼女が言うには「ただ単にアメリカに住んでみたいだけ。」

その時から、メールグループがスタートし、情報交換が始まりました。幸子さんの職場はボルチモアの刑務所で、刑期を終える囚人の自立支援でした。アメリカでは就労には年齢制限はなく、資格、能力があればOKです。彼女は評価され、意思の疎通、文化の違いなどを乗り越え、6年間刑務所で働きました。もう少し日本に近い所に住みたいということで、退職し、10年前にシアトルへ移りました。



この引っ越しの顛末が、私の想像を絶するものでした。東海岸のボルチモアから西海岸のシアトルまで単純計算で4447キロの距離を、コンテナに積み残した家財道具を小さなトレーラーに載せ、自動車を引きながら走ったのです。約9日間の旅でした。目的地は400世帯の高齢者専用の管理居住地域(上の写真)です。ここで

ご近所付き合いを楽しみながら、安心して生活できるとのことです。現在はご夫君がパートタイムで働いておられ、彼女は教会、病院、ショッピングなど、ご夫君運転の車で外出するだけの静かな生活とのこと。

幸子さんの専業主婦からの、海を越え、空を飛び、自立し、働く女性となった、挑戦と冒険の物語を私たちグループはメール友達として知らされてきました。夫の海外赴任に伴って、外国生活をする主婦はいるものの、幸子さんのような生き方をする人はとても少ないでしょう。彼女は若い時から、自然体で、柔軟で、淡々とした語り口の淑女です。アメリカの自然、人々、文化の様子を、彼女を通して私たちは生々しく伝えてもらっています。朋遠方より来たるあり。また楽しからずや。